

反日武装斗争の勝利のために(2)

— 反日都市ゲリラ兵士の守るべき

原則—心得について—

はじめに

われわれは、反日都市ゲリラ兵士として反日都市ゲリラ戦を開始する時、われわれの戦闘力を高め、勝利を保障していくために、さまざまな戦闘技術を熟知し、習得しなければならぬ。そして、それと同じ重要性をもって、われわれは、都市市民社会で戦い抜き、生き抜くために、公然合法闘争あるいは半合法闘争（大衆の実力闘争）とは発想をまったく異にする反日都市ゲリラ兵士としての守るべき原則—心得を熟知し、習得しなければならぬ。

われわれは今、チェ・ゲバラの『ゲリラ戦争』（三一新書）やカルロス・マリゲーラの『都市ゲリラ教程』（三一新書）から、ゲリラ兵士として堅持すべきモラル、勝利に

向けて必要とするゲリラ兵士として守るべき原則—心得を体系的に学ぶことができる。そして、毛沢東の『軍事論文選』（東方書店）やポー・グエン・ザップの『人民の戦争・人民の軍隊』（弘文堂新書・絶版）から、基本的な革命戦争の軍事力学と、勝利する人民戦争の弁証法を学ぶことができる。われわれは、優れた革命の先達の表わしたこれらの教本を、反日都市ゲリラ戦を開始する際の基本とすべきテキストとして活用すること、（従って、もし友人諸君が、これらの教本をまだ読んでいないならば、先ずもってこれらを読むこと、特にゲバラとマリゲーラの二著は必ず熟読することを要請する！）そして、革命史の実践的教訓をしっかりと受け止めて、血肉化することを確認しなくてはならない。

以上のことを前提として、われわれは現在の日帝本国内の特殊具体的状況の中で、反日都市ゲリラ戦を勝ち抜いていくための原則を確立しなければならない。

われわれは、『腹腹時計』VOLUMEにおいて、「武装闘争を大衆運動の自然延長線上に構えてはならない」と、反日都市ゲリラ戦を遂行していく上でのいくつかの基本的原則、反日都市ゲリラ兵士の守るべき心得を提起した。以下においてわれわれは、『腹腹時計』VOLUMEで提起した原則を踏襲しつつ、東アジア反日武装戦線三部隊の勝利的戦闘と75・5・19敗北の中から特に教訓とすべき反日都市ゲリラ兵士の守るべき原則—心得を、具体的に提起する。

(1) 日常生活上の心得—都市市民社会で生き抜くために

○ 反日都市ゲリラ兵士は（反日都市ゲリラ兵士を物心両面にわたって具体的・直接的に支えている非公然支援員も同じであるが）、その真の姿を敵に知られてはならず、そのためには地域住民に不審がられて敵に通報されることのないように市民社会にとけ込まなくてはならない。その表面的な日常生活は、目立たぬ、ごく普通のものでなければならぬ。生活様式、服装、言動などにおいて、その生活地域に適合したものでなければならぬ。

反日都市ゲリラ兵士は、ごく普通の工場労働者であり、会社員であり、学生であり、主婦であるように地域住民

から見られねばならず、住民の出入りや生活時間などで、地域住民から不審がられるような不自然さは極力避けなければならない。

○ 反日都市ゲリラ兵士の矜持は、自分の反日都市ゲリラ兵士としての実像を徹底的に隠しきることによって保持される。この大前提の原則を守りきれず自分の実像を見せてしまう者は、ゲリラ兵士としてのもつとも基本的な資質を欠き、ゲリラ兵士失格である。

○ 被逮捕歴があるか、またはなくとも公安秘密警察にマークされている者が、反日都市ゲリラ戦を開始する時は、小手先のやり方で敵の目をごまかそうとするのではなく（例えば、偽装ブル転として、宗教活動を行ったり、遊びほうけてみたりなど）、完全に地下に潜り、匿名兵士として戦わなくてはならない。

○ 都市は敵の公然非公然のスパイどもと隣合わせの生活をする危険が少なくない。特に、民間のアパートの所有者や管理人は退職または現職の警察官が多く、こうしたアパートに入居した場合は、敵そのものと生活を隣合わせにし、日常を監視されることになるのである。従って、反日都市ゲリラ兵士は、隣人たち、アパートの所有者や管理人の職業を把握することが必要である。この時、既に先方から観察されているかもしれないということを考慮して、「さりげなく」調査することが必要である。

○ 電気・ガスの使用量に注意すること。一般の家庭で使用
する量よりも極端に少なくなったり、反対に、極端に多く
ならないように注意すること。極端に少ない場合は、そ
こで生活が営まれていないと思われるし、極端に多い場
合は、武器製造用の電動機具などを使用していると思わ
れるからである。

○ 公安秘密警察は、電気やガスの使用メーターをも調べ
ているのである。

○ ゴミを出す時には、細心の注意を払うこと。反日都市
ゲリラ兵士としての自分の実像が見られる危険性のある
ゴミは出してはならない。メモなどの紙片は、家の中で
燃やして、ゴミとして出さないこと。ビンやカンなどの
燃えないものは、原型をとどめないように破碎した上で、
居住地域から離れたところに、然も敵にマークされてい
ないことを確認した上で捨てるような配慮が必要である。

○ 東アジア反日武装戦線三部隊の被逮捕の直接の契機は、
公安秘密警察にゴミを回収されたことであつた。

○ 外出する時は、その間に誰かが住居に侵入したかどう
かを感じできるように、簡単な仕掛けをしておくこと。

○ また、外出する時は、武器、秘密書類など、自分が反日
都市ゲリラ兵士であることを示す一切のものを厳密に隠
し、荒らし回られたら、すぐにわかるように、室内は整
理整頓しておくこと。

整理整頓を習慣づけることが絶対に必要である。

(2) 日常生活上の心得——敵との神経戦。

心理戦に勝ち抜き、戦闘を準備するために

○ 反日都市ゲリラ兵士は、マリファナ・覚醒剤を喫飲し
てはならない。精神安定剤・睡眠薬・鎮静剤の常用（中
毒になること）も禁止である。そして、アルコールも飲
用禁止が原則である。がしかし、アルコールの場合は、
少量を薬用として飲用する場合や、自分の反日都市ゲリ
ラ兵士としての実像をカムフラージュするために飲用す
ることが有効な時は、厳格な自己規律の上に少量の飲用
は許されるであろう。（戦闘準備中や遂行中にはアルコ
ールの飲用も全面禁止である。）

なぜ、これら喫飲が禁止なのか？

これらの喫飲は、正常な神経機能を一時的、あるいは
永続的に麻痺させ、正しい戦いの遂行を防げるからであ
る。そして、これらの喫飲による正常な神経機能の一時
的あるいは永続的な麻痺は、戦闘遂行上、重大な失敗を
犯す危険があるばかりでなく、公安秘密警察やスパイど
もとの日常の熾烈な神経戦・心理戦に敗化をもたらして
しまう危険があるからである。

○ 日常不断に身体を鍛えること。健康の維持・体力の強
化を軽視しては、絶対に反日都市ゲリラ戦を勝利的

に、持続的に戦い抜くことができない。

○ 東アジア反日武装戦線「狼」部隊の虹作戦（天皇ヒロ
ヒト処刑）は、「狼」の兵士たちの体力がより強靱であ
つたならば、貫徹できていたかもしれないのである。こ
のくやしい教訓は、必ず生かされなければならない。

○ 反日都市ゲリラ兵士が、本名で職について生計を立て
ていようと、地下に潜って匿名で生活していようと、自
分達の実像を隠しているにもかかわらず、身の回りに犬
どもが出没し、尾行や聞き込みを開始していることが察
知できたら、一切の樂觀は捨てねばならない。その場合
は速やかに、本名で職についている者は地下に潜り、既
に地下に潜っている者は、他の安全な場所へ移動するこ
と。

○ 身の安全のために、決断をためらわぬことが要求され
るのである。

○ 奪取あるいは購入した武器・薬品・機具などは、可能
な限りその製造番号を消し、レッテルをはがすなど手に
入れた時のままの状態にしておかないことを習慣づける
必要がある。このようにしておけば、被逮捕あるいはガ
サ入れという最悪の事態の時、敵の捜査を簡単には許さ
ない。

○ 武器製造などの作業を行なう時に発する音や臭気、そ
して作戦会議などの時の話し声が外にもれて地域住民に

不審がられないように気をつけ、防音（例えば、地下に
工場を作る）、防臭（例えば、コーヒー豆やカレー粉を
炒つて、その匂いでカムフラージュする）の措置を講じ
ることが必要である。

○ 反日都市ゲリラ兵士は、闘争日誌、住所録をつけて残
しておいてはならない。三部隊の敗化の教訓としてこの
ことは強調されなければならない。反日都市ゲリラ兵士
は記憶力を強化し、必要な事項は全て記憶しなければな
らない。

○ なお、金銭出納記録は必要不可欠なものであるが、そ
の記録の中から活動内容が読みとられない最小限度のも
のにとどめ、然も敵にわからない方法で記録することが
必要である。

○ 秘密書類や薬品類などは整理整頓した上で一ヶ所にま
とめて保管し、敵が踏み込んできた場合、あるいはその
住居を遺棄して逃亡する場合には、一瞬にしてそれらを
処分（例えば、時限式の爆燃装置をセットしておく）で
きるような装置を作つておくことが望ましい。

○ 電話は盗聴され、手紙は開封される危険があることを
忘れてはならない。連絡の原則は、あくまでも直接口頭
によるものである。しかし、止むを得ずに、電話や手紙
を用いて連絡する場合は、あらかじめ確認してある暗号
を用いて、盗聴、開封された場合でも、発受人とも反日

都市ゲリラ兵士であるということが知られず、連絡内容の真の意味も読みとられないように安全を期さなければならぬ。

○ 喫茶店は長時間の討論をする場合に使用してはならない。喫茶店の使用は、簡単な連絡をする場合に限り、もし時間がかかる場合は、他へ場所を移すようにすること。そして同時に集って話す人数も、せいぜい3人を限度とすること。喫茶店にはスパイが多く、犬そのものも客として入り込んでいることが多い。

○ 敵につけ入る隙を与え、敵の介入を許す危険のあるいかなる個人行動（例えば、本などの「窃盗」、スピード・オーバーや信号無視の「交通違反」など）もしてはならない。反日都市ゲリラ兵士は、自分の言動の全てが組織の安全を左右している、ということ強く自覚していなければならない。

○ 尾行されていることが考えられない場合でも、必ずチェック・ポイントを設け、尾行されているか否かを毎日点検すること。また、奴らが定点監視する場合、その位置は住居・職場と最寄りの駅やバス停の間に設けられるので、その間の警戒を怠らないこと。

○ 公安秘密警察の犬どものイメージを固定化してはならない。奴らは、30代後半から40代後半にかけての、眼つきが悪く、ガッチリした体格のいかにも「犬」というタ

イブが多いが、しかし、三部隊を尾けた犬の中には若い女の犬も加わっていたし、20代で長髪・やせぎすのジャンパーにジーパン姿の犬もいた。

反日都市ゲリラ兵士は、犬どもを見つめる目を柔軟にしなければならぬ。

(3) 作戦遂行上の心得——戦闘の勝利を保証するために

○ 作戦の手順は、①（戦略・戦術体系に従って）攻撃目標の設定、②攻撃目標に関する十全な調査、③作戦計画の立案、④作戦に必要な準備と訓練・実験（予行演習）、⑤作戦計画の補正と最終確認、⑥決行、⑦退却、⑧総括（新たな戦闘の遂行に向けて）、である。

作戦は、小から大へ、単純なものから複雑で高度なものへと発展させていくが、この図式を固定化してしまい、緊急に問われている作戦を、「力量が不足しているから」とか、「まだその作戦を担うまでの段階に力量が至っていないから」などという理由で回避してしまうことは日和見主義である。無謀な冒険をしてはならないが、問われている作戦に力量を向上させていく方向で戦闘を遂行しようとする必要がある。

○ 攻撃目標の調査・偵察は、十分に厳密に行なわれなければならない。

作戦の成功の可否は、調査・偵察が十分に、厳密に行

なわれるか否かにかかっている。攻撃目標（敵）を正確に知ることなくしては、その作戦は絶対に勝利し得ない。攻撃目標（敵）を正確に把握し、作戦遂行に必要な全て（攻撃目標附近の地理、そこに至る交通、何通りもの退却路など）を調査偵察することこそ、反日都市ゲリラ戦を勝利的に遂行する第一歩である。「調査なき戦闘をしてはならない」「これはゲリラ戦の鉄則である。」

なお、調査・偵察の時、それが調査・偵察であるからと決して安易に構えてはならず、作戦遂行時と同じ緊張と警戒（敵にこちらの動きを察知されないこと、こちらの身元が割れる危険のある身分証明書類などは一切身につけないことなど）をもって行なわれなければならない。

○ 作戦計画は、綿密な調査・偵察の上に立って、作戦の意義、目的を踏まえ、彼我の力関係を十分に検討して、日帝中枢の急所を的確に撃つものとして立案されねばならない。そして、戦闘方法は、あくまでも敵の意表をつくゲリラ戦として展開し、「経験をもって創造し、創造をもって新しい経験をたくわえる」ものでなければならぬ。

作戦計画立案に際しては、隊内民主主義的討論を徹底的におしすすめること。全員の意志一致が勝ち取られ、全員が立案した作戦計画の勝利を確信するまで討論すること。「不安だがひとつやってみよう」という大雑把な

冒険主義的計画を立ててはならない。「何とかなるさ」では絶対に勝利することはできない。「自分は疑問があるが、みんながいいと言うならば、それでいいや」というような、主体性のない消極的姿勢で、確信を持っていないのに他の意見に賛成してみたり、非共産主義的に反対意見を強圧的にはねのけてしまつては、絶対に勝利することはできない。

作戦計画は、共産主義的共同性（同志関係における官僚主義など非共産主義的關係は克服されねばならない。）に貫かれた反日都市ゲリラ部隊の中で、全員が自分の意見を言い合い、全員の意志一致のもとに立案され、全員が立案した計画に確信を持つものでなければならない。こうした組織性に保障され、全員の勝利に対する絶対的確信をもって立案された作戦計画は、全員の高い志気でも必ず勝利的に遂行される。

○ 作戦計画は、攻撃の成功のみならず、退却の成功を導くものでなければならない。しかも、退却の方法とルートは、あらゆる場合（最悪の場合も含めて）を想定して、現実的に何通りも立案されねばならない。退却の方法とルートを確保できない戦いをしてはならない。なぜなら、反日都市ゲリラ戦の前進と拡大は、ゲリラ兵士・部隊が生き続けることにあるからである。従って、文字通り決死的な戦い、後がない戦いは採用すべきではなく、一見

決死的な戦い（例えばハイジャックや館物の占拠など）であっても、必ず退却の方法とルートは事前に設定しておかなければならない。

反日都市ゲリラ兵士が生き続けること、すなわち戦闘を持続させることが革命の勝利を導くのである。

「必ず勝つ戦いを遂行すること」、これはゲリラ戦の鉄則である。

- 作戦計画を立案したならば、必ず計画どおりの演習を行なうこと。計画どおりにやってみると、必ず何か計画の不十分な点、欠陥があることがわかるので、それを補正しなければならない。

補正された作戦計画に従って演習を行ない、改めて作戦計画と任務分担などの最終的確認を行なう。

- 訓練と実験は、長期的、短期的方針を設定した上で、計画的に行なうこと。

長期的の方針に基づく訓練と実験とは、反日都市ゲリラ戦に必要なとされる基本的な戦闘技術の熟知と習得（例えば、車の運転技術の習得、銃・爆弾の扱い方、製造法など）のことであり、短期的の方針に基づく訓練と実験とは作戦計画に沿った具体的な演習とその準備のことである。

反日都市ゲリラ戦は、ゲリラ兵士が戦闘技術を熟知し、習得しなければ、つまり訓練と実験を積み重ねれば、絶対に勝利的に遂行できない。いくら反日思想を確固として持ち、

気高いゲリラ兵士としてのモラルを持っていても、戦闘技術を軽視し、訓練と実験がおろそかにされるならば、絶対に勝てない。このことは強く確認されねばならない。

- 爆破作戦に関して。

東アジア反日武装戦線三部隊八名の被逮捕後、誤爆事故が相次いでおり、敵につけ入る隙を与えているばかりか、ゲリラ兵士自らの命を失ってしまっている。誤爆事故の多発は、爆破作戦に対する安易な取り組み、すなわち、爆弾に関する基本的知識の欠如、そして訓練や実験を十分に行なっていない証拠である。

爆弾は、本来無差別的な機能を持つ武器であるから、扱い方を誤れば、敵のみならず味方、自分自身をも傷つける武器であることをはっきり確認しなければならない。それ故、爆破作戦計画を立案したならば、爆弾に関する基本的知識を学び、爆弾の扱い方を熟知し、習得すること（簡単な化学の知識、爆薬の知識、電気に関する知識が必要）が絶対に不可欠である。こうした訓練をサポートし、安易に爆破作戦を計画し遂行してはならない。安易な取り組みは味方陣営に痛いダメージを与える危険性がある。わずかな時間と、わずかな労力を惜しんではい

ならない。爆破作戦は、爆弾が無差別的な機能を持つているため、可能な限り爆破目標に接近して爆弾を仕掛けてその無差

別性を封じ、攻撃すべき目標（敵）をこそ撃つようにすることが必要である。三菱重工爆破作戦と同じ誤りを繰り返してはならない。すなわち、爆破作戦においては、作戦の意義・目的、そして攻撃対象（敵）を十分に検討し、具体的に確定した上で爆破地点、爆破時間、爆弾の威力の大きさを決定しなくてはならない。

- 徴発（武器・資金）作戦に関して。

特に、戦闘資金を徴発するための作戦は、その徴発対象と方法を十分に考え抜き、人民から支持を得られないものは採用すべきではない。すなわち、銀行をはじめとした金融機関に対する襲撃や政府高官・ブルジョアジーなどを捕捉して資金と交換するという徴発作戦は採用されても、路上の老女から金品をひったくったり、小児を誘拐して身代金と交換するようなことは、決してしてはならない。このような安易で、卑劣な方法は革命とは無縁であるばかりでなく、反革命的であり、断罪されるべきものである。

金融機関襲撃については、共産同赤軍派のM作戦を行なった諸君から、具体的な総括が出されている。それに依れば、①十分な調査（襲撃の警備状況、金の有無など）によって、②襲撃人員と時間を決定し、③確実に退却し得るルートと方法を確保した上で、断乎としてスピーディーにやる必要があるとされている。すなわち、

徴発作戦においても、作戦の手順に従って、原則的に遂行されねばならないということである。

- 決行は、帝政の政治的・経済的・軍事的中枢の急所を撃ち、反日の道義性をつき出す戦闘によって、人民を鼓舞し、人民から支持されるように断乎として展開されねばならない。

- 退却は、確実に、断乎として行なうこと。退却が成功裡に成されて、はじめて作戦の成功が確定するのである。

総括は、軍事的側面からと、政治的側面から行ない、軍事的総括はリアリズムに徹して行なうことが必要である。過大評価をせず、謙虚にありのままに総括すること。もし、失敗があった時は、徹底的にその失敗の根を掘り出し、その根を完全に絶つまで行なうこと。根源まで掘り下げず、中途半端なままにしておいてはならない。東アジア反日武装戦線「狼」部隊は、三菱重工爆破作戦の失敗を真に総括し得ず、克服し得なかつたが故に、被逮捕後自白敗化を促進した。「狼」と同じ誤りを繰り返してはならない。一切のなれあい、まあまあ主義、暗黙の了解などのアイマイさを排し、共産主義的共同性の中で、各自が心の底から意見を出し合い、自己批判——相互批判、自己点検——相互点検を行ない、真に組織的な総括を行なわなくてはならない。

こうした真の組織的総括こそが、次の作戦の成功を保

障していくのである。

おわりに

「ピストルに限らず銃火器という殺人器具は、使用する者を必ず墮落させる。銃火器を身につけていると、いつの間にか銃火器そのものが、銃火器を持つ者の精神の一角を占領し、これに頼る習性を生み出す。革命の論理、政治の暴力がこの銃の筒先により決定されるのだが、階級的人間が銃の筒先を支配し、自由自在にできないと、銃が銃の法則で独走する。銃をもつ集団が、銃をもって自らの自由と人民の自由をかちとろうという階級の敵の圧制をはねかえし、てんぶくするという闘いの原則をわずかながらも忘れたとき、軍事冒険主義を生み出す。言葉でいう軍事冒険主義は怪我を生まない。しかし、銃をもつ集団の軍事優先主義は、射殺の論理で、すべてを処断できるのだ。」（『南朝鮮のゲリラ戦士群像 其の二』許元沢）

われわれは、待機主義と日和見主義を否定し、自らの反日都市ゲリラ戦の遂行によって革命的状況を創出していくという攻撃的戦略の実践的立場を堅持している。しかし、われわれは決して好戦主義者でも軍事冒険主義者でもない。われわれは帝国主義者による侵略戦争を粉碎し、植民地支配、階級支配を消滅させるためにこそ武器をとって戦うことを決意しているのであり、軍事冒険主義には反対

している。われわれは、反日都市ゲリラ戦の遂行を通して、武器にふり回されない、確固とした反日思想を確立していくのである。このことを、同志、友人諸君と確認したい。

反日都市ゲリラ兵士は、日常生活においても、作戦遂行上においても、細心の注意と警戒を一時も怠ってはならない。一時も油断することなく、公安秘密警察との神経戦、心理戦に打ち勝って進撃しなければならぬ。

では、反日都市ゲリラ兵士を、こうした不断の緊張に耐えさせているものは何か？

それは、被植民地人民の解放に向けた進撃に学び、彼らと呼応し、合流して日帝を撃ち、必ず世界帝国主義を打倒するという勝利の確信である。そして、勝利の確信に基づいた、どんな困難な状況にも決して弱音を吐かないしたたかな明るさとおおらかさであり、日帝中枢を攻撃する喜びに満ちた戦闘性と攻撃性である。戦闘作戦を遂行できる喜びなのである。

同志、友人諸君！ 断乎として反日都市ゲリラ戦に邁進しよう！